

## 在宅療養文化の社会学

### —ビデオエスノグラフィー的实践—

○神戸市看護大学 榎田美雄  
医療法人かがやき  
総合在宅医療クリニック 若林英樹  
愛知学泉大学 堀田裕子

要旨：在宅療養文化をビデオエスノグラフィーの手法によって探求した。結果として、

- ① 医療・福祉資源の社交資源への流用、②過去の療養の痕跡の家族歴史化、③演劇化されることで馴化される介護負担、等が発見され、療養文化の異種混淆性が確認された。

#### 1 目的：在宅療養文化研究の基本的視点と今回の報告の狙い

在宅療養文化研究は、病院医療と在宅医療の対比に関しては、中立というよりは、在宅療養促進的な研究を志向している。すなわち、以下のような価値的なものの発見を志向している。

つまり、在宅療養には、

- ① 病院とは違った社会関係文化があり、医療・福祉資源は社交資源に流用されていた。  
(例：ALS患者のおもてなしや、ケアレシーバー熟練者としてのこだわりの発揮場面)
- ② 病院とは違った病状変化の意義づけがあり、過去の療養の痕跡は家族内歴史化されていた。  
(例：神経難病患者のベッドまわりには、療養当初使っていたリモコンが地層化していた)
- ③ そして、病院とは違った状況管理方式があり、負担の重いケアがハッピーエンドの物語にされて、状況の深刻さを緩和するように働いていた。

(例1：末期がん患者の「伝統」の活用、例2：素人的危機管理方式(齊藤・榎田2011))

なお、我々の主張は、「在宅療養」を、「病院内療養」に準じたもの(病院より劣ったもの、病院的になることを目指すべきもの、病院を基準に評価されるべきもの)として、位置づける見方から脱しよう、という主張である。社会学の多様な知的蓄積を総合的に活用することで、この主張の中身を充填していきたい。ビデオエスノグラフィーの可能性を諸社会学の統合的活用の方向に求めてみる、というのが、今回の試みの新しさ(題名末尾が社会学の理由)である。

#### 2 方法

方法としては、ビデオエスノグラフィーの手法、すなわち、豊富なエスノグラフィー的知識を参与観察や長時間インタビュー等のさまざまな方法で得たうえで、さらにビデオ画像を得て、その動画を複数回のビデオセッションで解析する形のエスノメソドロジーを用いたが、その活用においては、社会学の総合的活用を心がけた。なお、取材には、キングジム社の『ミーティングレコーダー』のバッテリー運用化を計り、結果、周囲360度を同時撮影できて、大変有用だった。

#### 3 結果

分析の結果は以下の通り。まず、資源動員論的に、異種間で資源の流用がなされている例として、医療・福祉資源の社交資源への流用が注目された。ついで、②「空間に垂直に積み重なる時間」(濱日出夫,2010)という「記憶と場所」論の成果が移入され、療養室が療養的資材で埋もれていくことが、必ずしも医療化の強化の方向にだけに働くものでないこと、療養生活という生活時間が家族の歴史になっていく流れとしても解釈可能であることが主張された。最後に、③レリバンズ論が活用され、療養者の出身地の観光みやげを療養室に持ち込むことで、同時に観光地の背景にある伝統的物語が、療養室内で有意義なものとしてされていくこと。その結果、負担の重い排泄介助等の現実のケアワークが、ハッピーエンドの伝統的物語の一部であるかのように演劇化され、馴化されていく実態が分析された。これらの発見は、生成後の在宅療養文化が、異種混淆的存在だけでなく、その文化生成のメカニズムそのものが、異種混淆的であることをも示唆しているようだった。文化研究のフィールドとしての「在宅」の可能性が示されたともいえよう。

★本報告は、科研費「在宅医療文化のビデオエスノグラフィー」による研究成果の一部である。